

読売歌壇

小池 光選

この家の中の小さな家だったベビーベッドが眠る物置

【評】家の中にある、さらにも小さな家。それがベビーベッドだ、という発見があたりらしい。言われてみればいかにもそうだ。赤子がすやすや眠る。あれから何年過ぎたか。夕ぐれの間で回り将棋したつねとじちゃんの居た夏休み

佐世保市 鴨川 富子

【評】「つねとじちゃん」とひらがな書きしたところがなんとも遠い思い出らしくて、気持ちが出てくる。むかしは縁台というものがあつた。回り将棋という遊びもあつた。長年を施設の中で暮らす叔母はペルー産アボカド手取り見つけぬ

所沢市 岡田 陽一

【評】事実をありのままに述べただけだろうが、一種の謎があつて、印象的である。老いたる叔母と一個のアボカド。絵になる。その内に何とかなると思ひつづなるともならず八十二歳に

城陽市 相原 洋次

我八十路嬢しきことは三人の尻戦なき世に育てしことか

市原市 桜井 登代

弟の初任地だったというだけで島根松江の天気気にする

名古屋市 山本 望

栗木 京子選

職場への直行バスが道連れ小指の先つちよぼどのときめき

【評】「直行」は味気ない。あまり遠回りは困るが少しだけの迂回ならハブニングに胸がときめく。まして職場へのバスならば。「小指の先つちよぼど」の比喩が効いている。川花火に行く人々の浴衣見ゆ靴履く子等の今風らしへ

沼津市 市川 明子

【評】コロナ禍が落ち着き、多くの場所ですぐに花火大会が開催された。せつかなので浴衣を着たものの、子供の場合は慣れた靴のほが安心。まさに今風の光景である。夏の朝、飯の炊け具合知らせるぼちキャンブの古希の友より

白野市 那須 真治

【評】単独で行つぽちキャンブ。飯がうま〜炊けると誰かに知らせたくなり作者にメールが来たのだろう。ほほえましい一首。姪と娘にそれぞれ一反形見分け亡夫の土産の琉球がすり

長野市 真鍋 賀子

元氣ですかと娘のくれしこの手紙下書きの跡ありありと見ゆ

匝瑳市 椎名 昭雄

四年ぶりプール開かれ尻らに混じりひときは高き先生のこゑ

あまの野市 小林 隆子

俵 万智選

悔しさはうま〜言葉にならなくて今さら音がなる遠花火

【評】悔しさを感じた瞬間と、悔しさが言葉になるまでの時差。それが、花火の光と音との関係に重ね合わされている。閃光のような悔しさと、遅れて湧き上がる言葉のもどかしさが、巧みに捉えられた。葛の葉の暖簾を肩で押し分けて観光バスがトンネルに入る

青梅市 諸井 末男

【評】生い茂る葛を暖簾に見立てたところがユニーク。観光バスの擬人化も、飲み屋に入る粹な人と思わせて、旅の景色が新鮮になる。窓際の君がボカリを飛行船みたいに夏の空へ浮かべる

千葉市 小金森まき

【評】ペットボトルのボカリスエツトだつた。夏らしいスナップショット。姿だけでなくボカリが擬態語のように動くところもいい。約束を予約の一種と思つて君が日時を指定してくる

大和郡山市 大津 穂波

まあいいや金曜日だし見送った電車一本週末へゆく

東京都 小林 愛美

何処までを海辺と呼んで良いのかを決めるまちづくりの協議会

小諸市 藤 雪陽

黒瀬 珂瀾選

今はない部署の名前のゴム印をひろう遺骨のようにやさしく

【評】職場の備品処分だろうか、もう廃止された部署の印が残っている。整理のために拾う手つきにも少し哀惜がある。かつて自分も在籍していた部署だったのかもしれない。卒業を待たず予科練志願せし友の名消さぬわれらが名簿

山口市 岡田 貞義

【評】正式には卒業していないが、予科練に行った同級生の名を乗せ続けるOB名簿。もしかしたらその友は戦死して、彼を偲ぶ意味があるのかもと思う。戦争の記憶の中の名前。義肢掲げる総身に汗の滑り落つ今日こそ髪を切るの一念

鎌倉市 中江 優子

【評】身体の手を握るこの猛暑は特になつただろう。生活の一つ一つを大きな熱意をもって行わなくてはならない。自愛を揺らされた優しい記憶無ければ揺らし方さえ知らぬゆりかご

富山市 若林 千影

五十年を働かしひと職退けはへおじいさん顔となりけるかも

仙台市 江川 森歩

廃線を余儀なくされる赤字路線員さんの旅情また一つ消ゆ

松戸市 加賀 昭人

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌壇(俳壇)〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はとんぼ